

令和7年度 自己評価及び学校関係者評価書

学校番号				
2	1	0	0	4
令和 7 年 3 月 26 日				
札幌市立			中央小学校	

1 今年度の目指す学校像

誰かがやさしく笑顔あふれる中央小学校

- ★全ての人がその人らしく輝く学校
- ★学びがい、通わせがい、働きがい、満たされた学校
- ★家庭・地域と共に学校文化を創りあげていく創造性に満ちた学校

2 本年度の目指す子ども像

主体的に考え、判断し表現することができる子ども

3 自己評価結果に対する学校関係者評価(学校経営の重点目標に沿って評価項目を設定)

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価		
		達成状況	改善方策等	自己評価の参考	改善案の適切さ	
知・徳・体の調和のとれた育ち 豊かな心	子どもたちは、自ら課題を見つけ、主体的に考え、判断し表現することができていましたか。	【子どもが主役の授業づくり】 教師は、子どもが学びの意味や価値を見出し、自ら課題を見つけて主体的に学びを進められるように、問いや方法の選択、対話、振り返りなどを通して「自ら-したい」を引き出す授業づくりと支援ができていましたか。	A	後援は、子どもたちが自ら課題を特定し、他者と対話しながら試行錯誤して解決を図る「協働で学ぶよさ」を実感する授業の実践に努めました。今年度導入した教員それぞれの「個人研究」スタイルが、各教員の授業づくりの質向上に具体的に結びついたことも、子どもたちの主体的・協働的な学びを引き出す大きな要因となりました。今後は、結果のみを「褒める」のではなく、思考の過程を「語る」、結果を「支える」意識を高め、自信をもって「関連えられる」安心感のある環境づくりを一層推進します。	A	A
		【教育課程の円滑な実施とその充実】 学年研修を通して評価規準を明確にし、子どものよさや伸びを認める指導と評価の充実を図るとともに、専科指導や学年教科担任制、学年としての取組を推進することで、子どもの学びを支える取組の充実が図ることができました。	A	学年内での連携や専科指導、教科担任制の活用を通じて、組織的に教育課程を運営する体制が整えられ、教員が互いに刺激し合いながら授業改善に取り組む活発な文化が醸成されました。また、研究部を中心に、単元構成の工夫が進み、子どもの学びを支える取組が充実しました。今後は、組織としての「まとまり度」を更に強化するため、全員一つの授業を見合い「語り合う機会を増やす」とともに、子どもの伸びを適正に認める「指導と評価の一体化」を一層推進していきます。	A	A
		【情報活用能力を高める学びのデザイン】 一人一人が情報手段を効果的に活用し、自発的な探究を通じて課題を見つけ、情報を収集・整理・思考・表現する中で、自分に合ったツールや方法を選択して学んだり、成果を共有・発信して他者とより良い学びを創り出し続けることで、学びの質を高めていましたか。	A	ICTや図書館を活用し、自ら情報を収集・整理して探究を進める力が育ちました。今後は情報を集める段階から、自分の考えを判断・表現する質的向上を目指します。失敗を恐れず試行錯誤しながら進める中で、自分に合ったツールを主体的に選択する力を養います。また、ICTによる成果の共有や発信を促進し、他者との対話を通じて学びを創り出す活動を充実させ、情報活用を通じた学びの質の更なる向上を図ります。	A	A
	子どもたちは、人とのつながりを大切に、自分やまわりの人々を大切にしていますか。	【自己の生き方を見つめる道徳教育】 道徳科を基として、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、生き方について考えを深めるような「考え、議論する」学習活動の充実を図ることができましたか。	A	年間を通して価値観を押し付けるのではなく、「自分事」として考え議論する授業を実践したことで、子どもたちが納得感を持って学びを深める姿が見られました。子どもの思いを否定せず受け止める受容的な風土づくりにより、子どもが自信を持ち、お互いの思いに気付いて話し合う「相互承認」の広がりが実感しています。今後は、具体的な行動面に基づいたより深い価値観の技術向上を図ったり、学校で学んだことを日常の習慣として定着させるために繰り返し指導したり、他者からの支えを「見える化」する工夫を推進します。	A	A
		【つながりを意識した行事や児童活動】 委員会活動や異学年交流、児童集会、学校行事を通して、子どもたちが他者と関わり合いながら思いやりや協力の心を育み、仲間と協力し合いを認め合いながら自分の役割を果たし、まわりの人を思いやる言動が表れるように、教師として関わりや支援を行うことができたか。	A	異学年交流や特別支援学級との連携を通じ、高学年が下級生の目録に立って優しく接したり、ルールを分かりやすく伝えたりする「リーダーシップ」の思いやりの姿が顕著に見られました。また、指導活動や児童活動など、自分たちで考えて協力する姿が、他者を尊重し仲間と協力しようとする意識を育てています。今年度も、今年度のように年間を通して教師主導から子ども主体への移行を円滑に進め、子ども自身が活動の目的を共有し、多様な他者と互いに学び合える関係づくりを強化していきます。	A	A
		【いじめの未然防止】 いじめは「しない、させない、許さない」学級、学校づくりを目指し、日常からいじめにつながる行為やからかい等、気になる行為や問題行動があった際には情報を共有することで一人一人の子どもの心と向き合う機会をつくり、寄り添った指導をすることができましたか。	A	いじめは「しない、させない、許さない」学校づくりを目指し、一人一人の子どもの心と向き合い、寄り添った指導を徹底してきた結果、困っている友達を支えたり温かい言葉を掛けたりする姿が多く見られるようになりました。学校、学級が安心して過ごせる場となっていると思えます。今後は、依然として見られる「グループ内での、関係性による指導環境を整え、他者への温かい関わりを日常化させるなど課題意識を踏まえ、そのための、気になる言動への迅速な情報共有、個々の内面を認める組織的な支援を一層推進していきます。	B	A
	子どもたちは、学校や家庭等、運動や生活習慣を通して、心と体の健康を保っていましたか。	【体力向上に向けた指導の充実】 研修等を通して「体を動かすことが好きになる」授業づくりを目指し、教員の資質向上を図ったり、栄養教諭や養護教諭、外部の講師等を活用して健康に関する指導の充実を図ることができましたか。	A	「体力向上プロジェクト」を中心に、特定の期間に運動機会を確保する仕組みを構築し、日常的に体を動かす習慣づくりができました。教職員も体育研修を通して、場作りや系統性を踏まえた授業展開の質を高めることができています。引き続き、運動会などの取組を単発で終わらせず、年間を通じた継続的な体力作りに向けた意識を高めています。教師が自ら動く中で、結果だけでなく思考や努力の過程を踏まえて、関わりを一層深め、体の健康維持のみならず、運動を通じた「心の健康づくり」を組織的に推進していきます。	A	A
		【生活習慣の充実】 教師は、健康や食生活、生活習慣、安全な行動などについて、日々の指導や活動を通して、子どもたちが心と体の健康を保てるよう支援することができましたか。	A	栄養教諭と連携し掲示物を活用した視覚的な教育を行ったことで、子どもたちが献立の栄養バランス(三色食品等)を意識するなど、自身の食生活に関心が高まる姿が見られました。今後は、家庭での連携を一層深め、子どもの生活習慣の確立に向けた指導や支援を進めます。また、単に体の健康を維持するだけでなく、運動や対話を通じた「心の健康づくり」にも重点を当て、心身両面から健康を保てるよう、組織的な指導を推進していきます。	A	A
		【子どもとともに運動に親しむ】 限られた環境を最大限に生かし、子どもと一緒に体を動かすことで健康な環境づくりをすることができましたか。	B	教師が子どもと共に運動を楽しむことを意識し、休み時間等には、教師が主体的に遊びの場を設定したり、子どもと一緒に体を動かしたりすることで、運動の意識を引き出し、自己有用感や達成感から環境づくりが進みました。しかし、運動を好きと子どもとすることが二重化は見られなかったため、引き続き年間を通じた継続的な体力作りを努めていきます。また、環境的制約を踏まえ、冬場や雨天時でも室内で手軽に運動できる場を検討していきます。	B	A
	学校関係者評価委員会による意見	<ul style="list-style-type: none"> ・内容がとても整理されており、学校としての努力が伝わってきた。 ・今後更に改善策について具体的な取組や目標が示されると、学校全体の取組が分かりやすくなると感じた。 ・言葉づかいについて、今一度見直していくことが必要。日常的に気持ちのよくない言葉を低学年もつかう子が多く見られている。 ・非アクティブ層への運動アプローチが必要。運動は「心身の健康やかな成長」に必要であり、運動する環境や時間が少なく感じられる。 ・共に運動に親しんでいる姿が見学することができてよかった。 				
	多様な学びの創造	子どもたちは、異学年との交流や特別支援学級と通常学級との交流の機会に積極的に参加していたか。	A	異学年や特別支援学級、校内外の交流において、高学年が下級生の目録に立って配慮するリーダーシップや、多様な他者と関わり合う受容的な姿が顕著に見られました。交流を「特別なこと」とせず、日常の中で自然に掛け合い、積極的に参加する文化が醸成されていることは大きな成果です。今後は、活動が日常的なもの(物販化)になるよう、子どもたちがより自分たちで運営する喜びを実感できる場を創出しながら、自分も相手も大切にすることを組織的に育んでいきます。	A	A
		子どもたちは、自己肯定感や自己有用感を高めることができていたか。	A	「自分も相手も大切にすること」や「学年として大切にしたいこと」を子どもたちとともに共有し、自己の成長や頑張りを振り返る機会をつくり、互いのよさに気付く、認め合うことができた機会をつくり出すことができていましたか。	A	A
子どもたちは、家庭や地域の人々に支えられていることを実感することができていたか。		A	地域人材の活用により、保護者と協働して子どもたちの学びを支えたりすることができるよう、働きかけることができましたか。	A	A	
学校関係者評価委員会による意見	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的な学びの推進やICTの活用、異学年交流や地域との関わりなど、子どもたちの学びと成長を大切にした教育活動が丁寧に進められていることがよく伝わった。 ・子どもたちが自ら考え、互いを尊重しながら学び合う環境づくりが大切にされているので、今後はそうした取組によって具体的な変化や成長やより分かる形で共有されること、学校や家庭、地域との連携がさらに深まることを期待している。 ・地域連携は非常に高いと思う。しかし、特定の教職員に限られている傾向もあるため、より教職員の顔の見える関係性づくりになっていくことを望んでいる。 ・遠足等での異学年交流が楽しそうだった。 ・「町探検」の子どもたちの発表が個々にとってもよかった。企画自体がよいと思う。 					